

『八重葎』論

一、〈境界〉の男女主人公

男主人公中納言は冒頭部において故左大臣の長男で、中宮の異母兄であって、母親は故上野宮北の方の妹であると紹介されていると同時に、「世をはかなきものに思ひとり給ひて、いかでこの世をすててしがな」⁽¹⁾（三五三）とあるように、中納言の仏道志向に触れられているものの、母親のことを考えるとそれを実行に移すことができないとも語られている。その後も、

○やがてこの世をゆきはなれて、いはけなきほどより思ひそめし本意をもとげて、……（三七七）

○これらの年月思ひわたる道をたづねで、この世もかの世もいたづらになしたらむ、これこそ仏のかたくいましめ給ふ道なれど、……（三七七）

○入りがたき道のしるべには、なほこの嘆きのしげきこそたつきにはならめと、いとどこの世をかりそめに思しならるるには、なかなかうれしき契りなりしを、……（三九一―三九二）

大倉 比呂志

○かかる所（注―いな笹原）にだに、笹のいほもひき結ばまほしう思すに、……（三九六）

○「昔より、深き本意ある身にて、……一人ものし給ふ上（＝母親）の思し嘆かんな心憂さに、今日までかくてながらへぬるを、かかる別れ（注―女主人公姫君の死）はかへりてうれしかるべき道のしるべなれど、なほさは思ひなられず」とて、またいみじうぬらしそへ給ふ。（四〇二）

などとあるように、随所で中納言の仏道志向が語られており、巻末では「さるは、月日にそへ、いとど聖になりまさり給ふ」（四〇四）とあるごとく、仏道修行にいそしんではいるものの、出家には至っていないのである。とすれば、中納言は仏道に傾斜してはいるものの、出家はできないといういわば俗世と仏界との〈境界〉に位置する人物として造型されていると考えられる。そのような人物として、自分の出生の秘密を感じ取っていると同時に、若くして出家し仏道修行に専念している母親女三宮の姿を見て、「阿闍梨、中将の君（＝薫）の道心深げにものしたまふなど（宇治八宮二）語りきこえて」⁽³⁾（橋姫巻）と語られているごとく、薫のことが想起されてくるわけだが、その薫も最終的には出家していないのだ。とすれば、薫も

また〈境界〉に位置する人物であると考えられ、中納言の人物造型に多大な影響を与えたものと推定される。

このように、出家志向がありながらも、結局は出家できない中納言は〈境界線上〉の人物であって、他の平安後期や中世王朝物語の男主人公の多くが薫型人物であるように、本物語における男主人公も薫と近似した人物として造型されている。⁽⁴⁾とすれば、出家できない中納言の代わりとして病気のために母親が出家し、また、女主人公姫君の死に際して女房である侍従が出家したのではなからうか。二人の出家はいずれも以前から仏道志向があったとは語られてはおらず、いわば突発的なものではあるが、二人は中納言の代理としての機能を帯びているのではなからうか。

さらに、中納言は中務宮たちと小倉山に紅葉見物に出かけた帰途、四条あたりの荒廃した屋敷で右大臣の劣り腹の姫君を垣間見て、契りを結んだ後、再び姫君を訪れた際の屋敷の光景は、

しぐるる木枯らしにうち散りたるならの葉は、遣水も見えずうづみて、庭のしとねといはまほしく、山里の心地してをかしきを、……（三六一―三六三）

とあり、特に傍線部「山里の心地して」と語られているごとく、〈都〉という中心にありながらも、〈山里⁽⁵⁾〉という〈境界〉にいたるような錯覚に中納言は陥っているのである。それは前述したように、中納言の心理が仏道に関して〈境界線上〉にいたるがごとき状況であったことに対応するために、姫君の住居も〈山里〉という〈境界線上〉にあるように設定されたのではなからうか。このように、中納言は宗教的に、姫君は地理的に、二人はともに〈境界線上〉に位置している人物なのであり、さらに〈境界的〉な場所に住んでいる姫君に、〈境界的〉な宗教的心理を有する中納言が通うの

であるから、中納言は二重の意味において〈境界的〉なのである。とすれば、中納言は〈中心〉には踏み込めない人物として造型されたのではなからうか。だからこそ、政界の〈中心的〉存在者である右大臣の娘、それも正妻腹の中君との結婚をするようにという亡き父親左大臣の遺言を履行できなかったのだ。

二、〈山吹の衣〉の意味性

中納言が女性に対して「少しも人しきあたりには、なげの情さへ言ひ出づべきものとは思ひ給は」（三五四）ないにもかかわらず、荒廃した屋敷に住んでいる姫君を見出し出すわけだが、それが夕顔巻の影響を受けている点は塩田公子に指摘があり、また、姫君が筑紫に連れ出される途上で死去した点は、『狭衣物語』における飛鳥井女君譚の変奏であると辛島正雄⁽⁷⁾によって詳細に説かれている。さらに、中納言が姫君に贈った〈山吹の衣〉に関して、『狭衣物語』冒頭部において、

御前の木立、何となく青みわたれる中に、中島の藤は、松にとのみ思ひ顔に咲きかかりて、山ほととぎす待ち顔なり。池の汀の八重山吹は、井手のわたりにやと見えたり。……（狭衣大将ハ）侍童の小さきして、一房つつ折らせたまひて、（狭衣大将ガ）源氏の御方（＝源氏宮）に持て参りたまへれば、……とりわきて山吹を取らせたまへる（源氏宮ノ）御手つきなどの、世に知らずうつくしきを、人目も知らず、我が身に引き添へまほしく（狭衣大将ガ）思さるるさまぞ、いみじきや。⁽⁸⁾

とあり、狭衣大将が源氏宮に〈山吹の花〉を贈る点との類似性が考えられ

るわけだが、ここでは〈山吹の花〉ではなく、中納言が姫君の正月用の衣装として母親に依頼して、母親が選んだのが〈山吹の衣〉であった点に注目すべきだろう。それは次のように語られている。

人々つきしろふに、(母親へ)心得させ給ひて、「あはれと思ふ人やもたる。もしさやうの料ならば、映えなきはものしと見るべきぞ。山吹、濃き綾の桂、桜の細長こそあざやかに、をかしうはあれ」とて、参らせ給ふにも、……

(三六六)

この〈山吹の衣〉を中納言は姫君に贈るわけだが、叔母の再婚相手が大弐となったために、叔母にだまされて筑紫に連れて行かれ、大弐の息子である民部大輔と結婚させられると思っている姫君は、中納言との間でやり取りした手紙を細かに破って海に投げ入れ、

思ひきや書き集めたる言の葉を底のみくづとなして見むとは

とて、袖を顔に押しあて給へるに、(中納言ノ)御心ざしなる山吹なるも、いとど心まどひして、

恋しともいはれざりけり山吹の花色衣身をしさらねば

と泣く泣く書きつけ給ふ時しも、民部の大輔寄り来る。(三八五)

と語られている。姫君にとって中納言との間でやり取りした手紙と〈山吹の衣〉とは中納言との思い出を想起させるよすがだったはずで、後者の「恋しとも」の歌は、「恋しいとも言えないことだ。山吹の花色の衣が身体を離れないから。この歌意は明らかではない。後考をまつ」と今井源衛は述べているが、「目の前にいない中納言に向かって、恋しいと口に出してはつきり言うことができないのは悲しい。でも、この山吹の花色衣を私は

身体離さずに着ているので、いつも中納言が私のそばにいるような気がして、心が安まる」という意味ではなからうか。後に、中納言は母親の湯治のために有馬温泉に同行し、住吉に参拝した後、「みつの寺」⁽¹⁾に奉納された「山吹色の幡」を中納言が見た件は次のように語られている。

待たれける鐘のつくづくとながめ居給ふに、山吹色の幡の、これはまたはなやかなるを、昔の人(「姫君」)につかはし給ふ衣の色思し出でて、……

(三九七—三九八)

これによれば、かつて中納言が姫君に贈った〈山吹色の衣〉であると確認したのであって、〈山吹〉とはあくまでも〈山吹色の衣〉の意味であった。その点から考えてみると、『源氏物語』玉鬘巻において女たちの新年用の衣装を光源氏が選んでいる件が想起されてくる。その衣配りの個所を引用すれば、

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染^{えび}の御小桂、今様色のいとすぐれたるとはかの(紫上ノ)御料、桜の細長に、艶やかなる搔練^{かいねり}とり添へては姫君(「明石姫君」)の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれどにほひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方(「花散里」)に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対(「玉鬘」)に(光源氏ガ)奉れたまふを、上(「紫上」)は見ぬやうにて思しおはす。

とあり、傍線部のごとく、玉鬘に対して〈山吹の衣〉が贈られたのだ。さらに初音巻において、

正身(「玉鬘」)も、あなをかしげとふと見えて、山吹にもてはやしたまへる御

容貌など、いとはなやかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく、隈なく見まほしきさまぞしたまへる。

とあるように、光源氏の贈った〈山吹の衣〉を新年に玉鬘は着用したのである。とすれば、姫君と玉鬘は他者から贈られた〈山吹の衣〉を着用したのであり、都から筑紫に向かおうとする姫君と筑紫から上京した玉鬘とを逆転させた形で姫君造型の一翼を玉鬘に担わせたのではなからうか。と同時に、姫君は中納言の視線から「いひしらずらうたげに」(三五八)、「あてにらうたく見ゆ」(三六〇)、「いとらうたし」(三六一)などと「らうたし」ととらえられており(十一例)、「らうたき」姫君と考えて差し支えあるまい。ちなみに、『源氏物語』に登場する主要な女性に対する「らうたし」「らうたげなり」の使用頻度数を調査してみると、紫上の二十三例を筆頭に、中君(十六例)、女三宮(十五例)、浮舟(十四例)、夕顔・玉鬘(ともに十一例)、雲井雁(十例。ただし、「らうたげさ」一例を含む)などとなっており、夕顔と玉鬘の母と娘は五位に入っている。とすれば、中納言の姫君発見の件が夕顔巻の影響を受けている可能性については既に指摘されているわけだが、そのこととあいまって、「らうたき」姫君の造型には玉鬘も関与しているのではなからうか。⁽¹²⁾

では、姫君の造型に関して、玉鬘だけが機能したのだろうか。若紫巻で光源氏は瘡病のために北山に赴き、北山には不釣合いな瀟洒な家を垣間見た際、「白き衣、山吹などの萎えたる着」た紫上を発見し、さらに、後に光源氏によって二条院に引き取られた紫上は「まばゆき色にはあらで、紅、紫、山吹の地のかぎり織れる御小桂などを着たまへるさま、いみじういまめかしうをかしげなり」(紅葉賀巻)と語られている。その紫上は母親

の死後、祖母の尼君に育てられているわけだが、尼君の兄弟である僧都の口から光源氏に対して「『兵部卿宮なむ忍びて(紫上ノ母親ニ)語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむごとなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし』」(若紫巻)と語っているところによると、紫上の母親は兵部卿宮の北の方から迫害されて死去したのである。その後尼君も死去したために、父宮が紫上を引き取ろうとする寸前に、光源氏が紫上を盗み出したので、北の方も「母君を憎しと思ひきこえたまひける心もうせて、わが心にまかせつべう思しけるに口惜しうおぼされけり」(若紫巻)とあるごとく、あてがはずれたのは、「養母として存分にふるまうつもりだということであろう。話型的には継子いじめを感じさせる」⁽¹³⁾と評されているように、この時北の方の手許にはおそらく実の娘が二人(後に冷泉帝の王女御、鬚黒大将もとの北の方となる人物)いたはずであるから、継子譚の要素が内在化されていると考えることができる。それは、

西の対の姫君(＝紫上)の御幸ひを世人もめできこゆ。……嫡腹^{むかひばら}の限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、安からず思すべし。物語に、ことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。(賢木巻)

とあるごとく、光源氏に引き取られた紫上が幸福であるのに対して、実の娘たちがそれほどでもないために、北の方は面白くないのであって、傍線部のように、継子譚の可能性が暗示されているのではなからうか。というのは、ここで兵部卿宮の北の方の呼称が初めて「継母の北の方」と語られており、上述のことを裏付けていると考えられるからだ。⁽¹⁴⁾この継母像は大

式との再婚後における叔母の造型に影響を与えたのではなからうか。

ところで、紫上は「周縁の場」⁽¹⁵⁾、すなわち、〈都〉の中心から考えれば〈境界〉である北山で成長したのであり、光源氏のもとに引き取られて幸福のモデルのように世間でいわれているようにも、「正妻にも妻にも決定されえない」紫上が〈境界線上〉の人物だという点に注意しておくべきだろう。とすれば前述したように、『源氏物語』における女性の主要登場人物の中で最多の「らうたし」が使用され、〈山吹の衣〉を着用し、〈境界線上〉の立場にいる紫上も姫君造型の一翼を担っているといえよう。

さらに、姫君と同様に荒廃した屋敷に住んでいる末摘花は光源氏に元日の装束を贈るわけだが、それは、

晦の日、夕つ方、かの御衣箱に、（光源氏ノ）御料とて、人の奉れる御衣一具、葡萄染の織物の御衣、また山吹かなにぞ、いろいろ見えて、命婦ぞ奉りたる。

（末摘花巻）

と語られており、また光源氏から新年用の衣装を贈られた返礼は、

みな、御返りどもただならず、御使の禄心々なるに、末摘、東の院におはすれば、いますこしさし離れ、艶なるべきを、うるはしくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の桂の袖口いたくすすけたるを、うつほにてうちかけたまへり。（玉鬘巻）

とあるごとく、末摘花は使者への禄として「袖口いたくすすけたる」〈山吹の衣〉を与えるのである。末摘花が〈山吹の衣〉を着用しているのではなく、二回贈与するのであるから、玉鬘や紫上の例とは趣を多少異にするわけだが、住居の荒廃と〈山吹の衣〉という点で、末摘花は姫君造型に対

して何らかの影響を及ぼしているのではなからうか。そのうえ蓬生巻で、末摘花の母方の叔母が受領の北の方となったことで、父常陸宮から屈辱を受けた腹いせに、父宮の死後落ちぶれた末摘花を自分の姫君の侍女にしようとしたが失敗したために、夫が大式となって筑紫に下ることになったのを利用して、叔母は言葉巧みに末摘花を同行しようとするが、末摘花に拒否されたのである。以上の点から、叔母の夫が大式となって筑紫に下向するということに注目してみると、『八重律』の話筋に重なるところがあり、本物語にそれらが取り込まれたのではないかと考えられる。

以上のように〈山吹の衣〉を基軸にして考えると、今まで述べてきたごとく、姫君の造型には玉鬘・紫上・末摘花といった女性たちのありようが複合的に絡み合いながら影響しているのではなからうか。いわば〈複合的影響による造型〉⁽¹⁷⁾がなされることによって、姫君の人物像が立体的に形成されることになる。いずれにせよ「山吹」とは本物語においてあくまでも〈山吹の衣〉であって、それが姫君を表象する記号となっている点を看過すべきではなからう。

三、紅葉見物の意味

中納言たち一行が小倉山に紅葉見物に出かける件は、確かに「華麗な王朝絵巻を思わせる場面」⁽¹⁸⁾であるには違いないが、それが作品全体の話筋の本流をはずれているのに、なぜ詳細に語られているのだろうか。

左衛門の君、桔梗の直衣、二藍の指貫、故づきをかしきさまして立ち出で給ひて、^①「なぎさ清くは」と、御けしきたまはり給ふ。……はかなう、世の常な

らずしない給ふめれば、をかしがり給ひて、紅葉をたかせて、大みき参る。
御ともに候ふ博士を召し出でて、苔の緑を払ふ人もありけり。琴ひきならし、
笛吹きあはせて、「伊勢の海」^⑩などうたふ。(三五七)

と語られている傍線部①②の出典は、①は『大和物語』一七二段に大伴黒主の詠として「ささら浪まもなく岸を洗ふめりなぎさ清くは君とまれとか」⁽¹⁹⁾とあり、これは『新千載集』(雑上・一六五五)に「亭子院石山にまうでさせ給へりける日、近江国のかき打出のはまに御まうけつかうまつりたりけるを、ただに過ぎなんとせさせ給うければよめる」⁽²⁰⁾の詞書で入集し、詠者は大伴黒主であるが、第二句は「ひまなく岸を」、第五句は「きてもみよとや」となっている。すなわち、ある場所にとどまること(来ること)を勧誘しているのである。②は催馬楽に「伊勢の海」きよき渚に 潮間になのりそや摘まむ 貝や拾はむや 玉や拾はむや⁽²¹⁾とあるのによっており、①の傍線部「なぎさ清くは」という語句からそれと類似したもの(「きよき渚」を含む「伊勢の海」が連想された可能性も考えられる。例えば『源氏物語』宿木巻で、匂宮は中君に箏の琴を弾くように勧めるが、中君は弾こうとはしないので、薫のことを持ち出して、『かの君(＝薫)に、はた、かくもつつみたまはじ。こよなき御仲なめれば』など、まめやかに恨みられ」るので、中君は仕方なく「うち嘆きてすこし調べたまふ」件の直後に、

ゆるびたりければ、盤渉調に合はせたまふ搔き合はせなど、爪音をかしげに聞こゆ。伊勢の海うたひたまふ(匂宮ノ)御声あてにをかしきを、女ばら物の背後に近づき参りて、笑みひろごりてゐたり。

と語られている。匂宮が「伊勢の海」をうたうのは中君との親密な関係の希求を意味しているわけだが、そうであるがゆえに、二人の夫婦仲の睦まじさに女房たちは感動して「笑みひろごりてゐた」るのである。とすれば、傍線部③の「伊勢の海」はこの場面において恋に関わる内容のものだといえよう。⁽²²⁾

また『うつほ物語』祭の使巻で、桂殿における夏神楽で正頼家の女性たちも同行し、そこに兼雅が来訪して、正頼と兼雅とが歌の贈答をする件は、左大将(＝正頼)のおとど限りなくよろこびたまひて、河づらに、左のかきの遊び人、殿上人、君たち率ゐて、遊びて待ちたまふとて、「大君来まさば」といふ声ぶりに、かう歌ひたまふ。

底深き淵を渡るは水馴れ棹長き心も人やつくらむ
右大将のぬし(＝兼雅)、「伊勢の海」の声ぶりに、

人はいさわがさす棹の及ばねば深き心を一人とぞ思ふ
とて渡りて、左右遊びて着き並みたまひぬ。⁽²³⁾

と語られている。傍線部「大君来まさば」とは催馬楽「我家は 帷帳も垂れたるを 大君来ませ 簀にせむ 御肴に 何よけむ 鮑栄螺か石陰子よけむ 鮑栄螺か 石陰子よけむ」であり、傍線部「簀にせむ」は「若干の戯れを込めて、歓迎の気持を表わしたものだ」⁽²⁴⁾であって、それに応じて兼雅が「伊勢の海」を念頭に置いて、「玉」にあて宮をたとえ、妻に望む気持を歌の調子に託したのである。「簀にせむ」と歓迎した正頼に対して、兼雅もくだけた調子で答えた⁽²⁵⁾のであるが、「くだけた調子」とはいえども、恋に関わる内容であると考えられる。とすれば、催馬楽「伊勢の海」は宿木巻や『うつほ物語』の例からもやはり恋に関わるものと理解

すべきだろう。

以上の点から、紅葉見物の帰途「若き人々、帰さの道に行き隠るべき心まうけにや、別れ別れに帰る」(三五七) 光景に刺激されたのか、四条あたりの荒廃した家から聞こえてくる琴の音という装置は典型的な恋物語の場面だが、中納言が恋心を催して築地の崩れより侵入した後、姫君を垣間見て、契りを結ぶ伏線が傍線部④と⑤の催馬楽だったのではなからうか。そのような意味において、これら二つの歌詞が中納言の中で隠蔽されていた〈性〉を刺激して、姫君に対して契るという行動を促進させたのだ。とすれば、それは垣間見した中納言の心中思惟「よしや、行きとまるこそ、宿ならめ。住みはつべき世の中かは」(三五八―三五九)と連動しているのだといえよう。傍線部「行きとまるこそ、宿ならめ」は『古今集』(雑下・九八七・よみ人しらず)の「世の中はいづれか指してわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる」⁽²⁶⁾の傍線部に依拠していると指摘されており、この垣間見した姫君に対する中納言の執着が暗示されている。というのは、中納言が乳母子のあきのぶを帰して、「『御車、あかつきにものせよ』」(三五九)と命じているからだ。そして「なほ思ひ立つ方のかなはで、心にもあらぬ世に、ながらふほどの慰めには、この人をや頼みてまし」(三五九)と中納言の心中思惟にあるごとく、出家できないのなら、生きている間の慰めとして、この姫君を相手にしようかと中納言が考えている点に表象されるように、中納言はこの姫君に魅了されてしまったのだ。とすれば、この紅葉見物の詳細な記事が中納言の闖入事件とその後における姫君との恋に脈絡している点を看過すべきではなからう。

四、登場人物の連鎖性

かつて鹿嶋正二が⁽²⁸⁾「実際登場人物も十指を屈するに足らず、その間物語に特有な官位の昇進等の記事もないので、極めてまとまった感じを与える。その為、読者をして多岐亡羊を嘆ぜしめる事な」いと述べている通りであるが、そのことは本物語とどのように関わっているのだろうか。

父親は中納言に右大臣の中君と結婚するようにとの遺言を残しておいたが、中納言が偶然にも垣間見し、契りを結んだのは、右大臣の劣り腹(注―故肥後守の北の方で、後に大弐の北の方になった女性の姉。右大臣北の方に仕えていた女房)の姫君であり、姫君の死後、それに伴って出家した女房の侍従の口から、

「今きこえさせし御叔母のこのかみは、侍従の君とて、右の大臣の上の御方に候ひ給ひしを、右大臣殿、まだ中将にものし給ひし時、御覧じすぐさずや侍りけん、この君生まれ給ふ」(四〇二)

と語られている。姫君は死去したけれども、とにかく右大臣の姫君であったわけだから、はからずも父親の遺言に添ったことになる。

また侍従という名は、姫君の母親が右大臣北の方に仕立していた時の女房名であったのと同時に、姫君付きの女房の出仕名でもあったのである。姫君の母親は死去し、姫君の死後、女房であった侍従も現世からの〈喪失〉を意味する出家をしたのであるから、姫君と侍従は二人とも〈喪失〉したという点でも共通している。とすれば、姫君付きの女房である侍従に姫君の母親と同一の女房名が用いられているということは、姫君の母親の死後、

侍従には姫君に対する母親代わりの役が担われたのではなからうか。

さらに、叔母の再婚相手である大式の息子の民部大輔が船上で姫君を口説いた際に、

「なにがし母なん、中務の宮の御乳母にてもし給ひてしかば、そのゆかりに、かの宮には親しく仕り侍る。この御思ひ人（『中納言』なん、（中務宮ト）いとよき御なからひにて、きこえかはし給へば、……」（三八六）

と語っているように、民部大輔の母親が中務宮の乳母であったのであるから、中務宮と民部大輔とは乳母子の関係であり、その中務宮と中納言とは親友である由が冒頭部近くで既に語られてもいる。

以上のように、本物語の登場人物における相互関係が緊密に連鎖しているのは、基本的に無駄のない人物しか登場させないという極めて合理的な作品であったという点とも脈絡しているのではなからうか。

五、〈たゆむ〉〈すかす〉文学——姫君の死をめぐる——

姫君の叔母は大式と再婚し、夫の任地に赴くことになるわけだが、最終的には姫君も叔母に口説かれて同行することになる。その過程は、

①「たよく（姫君ヲ）たゆめて、筑紫へまかるほどに、いざなひてまし」と（叔母ガ仲人ノ隣人ニ）いふ。（三七三）

②「今日なん門出し侍る。聞こえさせしやうに、あなたにものし給ふ人（『姫君』を誘ひたてんとて、かくまうで侍る。ひごろ、よく（姫君ヲ）たゆめおきつれば、調度やうのものも、とりしたたむべき心づかひも、え思ひより侍らでな

ん。……」など、（叔母ハ隣人ニ）うち笑ひ語らひて、……（三七八）

③（叔母ガ自分ノシタコトヲ）思ひ給へらん心のほどは、年頃、よろづにありがたく思ひ知らるれば、のたまはせんことを、おほかたにそむきこえんにもあらず。かくこそは思へなど、心うつくしう聞こえ給はば、人知れぬあはれを思ふまでこそあらめ、来し方行く先かき集め、思ひ乱るるばかりは、いとしもなくやあらん。さるを、くまなく（叔母ハ）思しかまへて、たゆめ給ふは、いかがうらめしからざらむ。……と、京の方のみ恋しくて、（姫君ハ）涙さへとまらぬを、……（三八一）

④「そのまま（叔母ハ姫君ヲ）舟に移し奉り給ふを、あさましくかくたゆめ給ひけるほど、また御前（『中納言』）のきこしめさんこと、あはれなりし御心ざしなごを思ひ続けて、（姫君ハ）いといったう泣き沈みおはせしに、……」と、泣く泣く、……（尼トナツタ侍従ハ中納言ニ）その夜のことも、いとおよく覚えて語りきこゆ。（四〇一）

とあるように、①②から叔母は姫君を油断させて、大式の息子民部大輔と結婚させるべく都から連れ出すのである。それに対して、③は姫君の心中から、④は侍従の口から、姫君は油断させられたと語られている。もちろん、

⑤さは、（叔母ガ）たばかり給ふにこそと、口惜しういみじければ、ことにものも言はれず、（姫君ハ）ひきかづきて臥し給ふ。（三八一）

のように、叔母の策略に乗せられたことを姫君は感知し、

⑥かつ憂き身ながらも、なほながらへば、必ず心ならぬ世（注——民部大輔と結婚させられること）をも見るべきにこそ。かう心ならずはかりこたる身とは、

いかで（中納言ハ）知り給ふべきなれば、さは思ひつかしと、（中納言ガ）思し寄らん恥づかしさは、まいて、なのめなるべき心地もせねば、この海にまろび入りぬべく悲しきに、……（三八二）

⑦きかるべくもあらぬこともを、（叔母ハ）うちまぜうちまぜ言ひ続け給へるに、（姫君ハ）例のものも言はれ給はねど、せめて（叔母ヲ）すかして、思ひ立つ（死ノ）道だに心安くと（姫君ハ）思ひなり給へば、……（三八二）

とあるごとく、⑥により姫君はだまされたと認識し、⑦において叔母をうまくだまして死にたいと姫君は思っているのである。すなわち、姫君は叔母の策略に乗せられたことを後悔して自死まで考えているのであり、叔母によって「たゆめ」られ、「かまへ」られ、「たばか」られ、「はかりごと」されたのであって、特に民部大輔によって結婚を迫られたことが原因となつて、失神し、死に至るのである。とすれば、本物語の核は姫君の死であり、①から⑦までの引用文によって理解されるように、姫君のだまされていく過程が執拗なほどに語られているのであって、それが前述したごとき傍線部の〈ことば群〉であったのだ。

ところで、大式との再婚話が持ち上がった際、「もとより少しひなび、なほなほし」（三七二・三九〇）にも「なほなほしき人」と記されている。い人と語られてはいるものの、叔母は、

「みづからのことは、今さらのよはひに、また人に見え奉らむも、よきこととは思ひ侍らねど、いみじうかなしと思ふ君（＝姫君）のために、よろしきことにて侍らば、命さへ失ひてもと思う給へば、ましてこれ（注＝再婚）は世の常あることなれば、いかがはせんに思ひ弱りて、もろともものし侍らむ。……」（三七二）

と語っている。大式の希望通り、姫君を民部大輔と結婚させることはやむをえないと考えたことは、既に若くはない叔母が経済的安定性を求めて再婚するに際しての一種の土産であり、大式との結婚生活をスムーズに開始させるための手段でもあったのだ。そこに再婚後における安定性を獲得したいという叔母の計算がしたたかになされていたはずだ。とすれば、随所で語られている中納言の母親を思う情と叔母の計算とは対照的であり、再婚する叔母の犠牲者となったのが姫君だったのだ。もちろん、再婚前には姫君の母親の死去により、「あはれに心苦しきことに思ひて、細かにはぐくみおふしたて給ふ」（三八二）叔母は、母親代わりの愛情を姫君に対して注ぎ込んだわけだが、再婚後は姫君を筑紫に同行させるために多分に脅しの要素が含まれてはいるものの、

「思すらん人（＝中納言）の、そのほどにものし給はば、あひ奉り給はざらん口惜しきに、かく心ごはく見え給ふか。女は、男に見ゆれば、かなしうする親はらからも、おほかたのものになり侍るとは、これにやあらん。……」
とうちむつかり給へば、……（三八〇）

に表象されているように、叔母は現在の安定を喪失したくないために姫君に対して高圧的な態度を示したのだと解せられる。そこに叔母の〈したたか性〉を見るべきではなからうか。このように再婚を境として姫君に対する叔母の態度には変化が生じた⁽³⁰⁾と指摘されているが、その叔母の落差に照射することによって、叔母の独自の人物造型――〈したたか性〉――が浮彫りにされてくるのではなからうか。確かに本物語において姫君は女主人公であるには違いないが、再婚後に〈したたか性〉を顕在化させた叔母の姿には躍動感があふれているのであって、この叔母にこそ陰の女主人公の名

がふさわしいのではなからうか。それゆえに、本物語は悪者が全くいない作品⁽³¹⁾として理解すべきではなく、叔母の〈したたか性〉に注目することによって、作品全体を立体的に把握することができると同時に、それが本物語の独自性を顕在化させることにもなるはずだ。

注(1) 『八重葎』の本文は鎌倉時代物語集成によるが、表記を私に一部改めた個所がある。なお、漢数字は当該ページ数を示す。

(2) 妹尾好信『『八重葎』の再評価』『中世王朝物語の新研究』新典社 二〇〇七・10)は、中納言の仏道志向の契機が父親の死にあると推定している。

(3) 『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集による。

(4) 妹尾注(2) 前掲論文。

(5) 津本信博『京洛』『源氏物語研究集成』第十巻 風間書房 二〇〇二・6)によれば、『源氏物語』には「山里」という語が五十八例あり、その多くは宇治・小野をさすと指摘し、三谷邦明「宇治・小野―源氏物語の

「山里」空間―」(前掲書)は、小野は「聖」と〈俗〉の入り混じる〈境界空間〉「山里」なる場所だという。なお、小野は「聖と俗の境界の地であった」(『源氏物語事典』大和書房 二〇〇二・5。小山香織執筆)と同様の見解が示されている。

(6) 塩田公子『『八重葎』題名考』(岐阜女子大学紀要 第十九号 一九九〇・3)。

(7) 辛島正雄『中世王朝物語史論』下巻(笠間書院 二〇〇一・9。初出、「文学研究」第八十二輯 一九八五・3)。

(8) 『狭衣物語』の本文は新編日本古典文学全集による。

(9) 妹尾(注(2) 前掲論文)は、中納言と母親との間には強いきずなが結ばれていると指摘している。

(10) 今井源衛『やへむぐら』(古典文庫)「附注」(一九六一・12)。

(11) 今井は注(10) 前掲書「解題」において、「撰津志三東生郡」の条にある「四天王寺」四天王寺村、山号龍陵、一名三津村、又名難波大寺(略)をあげて、参考になると指摘している。

(12) 中野幸一「八重葎」『日本古典文学大辞典』第六巻 岩波書店 一九八五・2)は、「この物語の構想の大枠は、貴公子が律茂る荒れた邸に美しい女君を発見して契りを結ぶという昔物語の一類型によっており、これは『源氏物語』の玉鬘や『狭衣物語』の飛鳥井女君などの構想を取入れて変化をもたせている」と述べている。辞典という性格上、その根拠を具体的に示すことは困難だろうが、傍線部のように、玉鬘との関係を指摘している点に注目すべきである。

(13) 新日本古典文学大系脚注。

(14) 須磨巻においても、「継母の北の方などの、『紫上ノ』にはかなりし幸ひのあわたたしさ。あなゆゆしや。思ふ人、かたがたにつけて別れたまふ人かな」とのたまひけるを、……と語られている。

(15) 注(5) 前掲事典。米沢公子執筆。

(16) 高木和子「結婚―光源氏と紫上の関係の独自性」(『源氏物語研究集成』第十一巻 風間書房 二〇〇二・3)。

(17) その他姫君階級としては、玉鬘と鬚黒大将との間の娘である大君(竹河巻)と宇治中君(総角巻)に、一例ずつ〈山吹の衣〉を着用している姿が語られているが、それらは姫君の造型に直接関与しないと思われるので、指摘だけにとどめておく。

(18) 妹尾注(2) 前掲論文。

(19) 『大和物語』の本文は新編日本古典文学全集による。

(20) 『新千載集』の本文は新編国歌大観による。

(21) 催馬楽の本文は新編日本古典文学全集による。

(22) 青柳隆志「源氏物語における朗詠と催馬楽」(『源氏物語研究集成』第九巻

風間書房 二〇〇〇・9)は、「物語中の「私」的な場面においては、催馬楽は「恋」の場面(夫婦間の応答も含む)に集中して用いられる」と指摘している。

(23) 『うつほ物語』の本文は新編日本古典文学全集による。

(24) 注(23) 前掲書頭注。

(25) 注(24) に同じ。

(26) 『古今集』の本文は新日本古典文学大系によるが、表記の一部を私に改めた個所がある。

(27) 今井注(10) 前掲書「解題」。

(28) 鹿嶋正二「散佚物語「八重葎」に就いて」(国語国文 一九三四・7)。

(29) 妹尾(注(2) 前掲論文)は本物語を「中納言の抱く強い親子愛が引き起こした悲恋事件」と把握している。

(30) 妹尾注(2) 前掲論文。

(31) 鹿嶋注(28) 前掲論文、今井注(10) 前掲書「解題」。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)